「小鳥の死」または「園行事」のこと

間藤　侑

秋の幼稚園や保育園は、行事とかけっこである。運動会に始まり、いも掘りやぶどう狩りに遠足、こうした戸外活動行事が一段落すると、すぐに文化祭やバザー、ふーっと一息ついたかと思うと、やがてクリスマス、それに個人懇談もあるし……、と考え出すと、それだけで心が慌しさを増してくる。園行事の見直しを、などと常々口にしながらも、流れ去っていく時間との競争の中で、保育の現場では、研修の機会さえままならないと嘆く声が多い。しかし、そんな悩みも、少なくとも幼児達には無関係である。

ある幼稚園でのことである。ある朝、登園して来た子ども達が、弱って死にそうな小鳥を発見する。彼らは、先ず何でも修理してくれる用務員のおじさんに助けを求めるが、もう手遅れと言われてしまう。先生の提案で、それならこの小鳥が神様のところへ行かれるようにみんなで祈ってあげようということになる。いつもは騒々しい五才児が、皆真剣な顔で小鳥を取り囲み、息をこらしてじっと見守っている。後からやって来たガキ大将も、いつもとは全くちがうクラスの様子に圧倒されて、そっと仲間に加わる。悲しさというようなかなり複雑な情緒を心に宿すことができるようになる五才児ならば、生き物の死の意味をかなり深く受けとめることが可能になる。しかし、ウサギのような哺乳類の死だと、幼児にとってはまだショックが大きすぎ、またザリガニやカタツムリなどの死は、幼稚園などでは日常茶飯事的で、血が見えないものに対しては、ごくあっさりした対応で終る。その意味では、小鳥は、彼らの心にふさわしい対象だったと言えるだろ

う。

こうして子ども達は、一羽の小鳥の死への過程に、約一時間近くも寄り添い、見守っていた。まぶたの動きが消え、先程までの体のぬくもりが冷たいものに変ってしまった時、彼らは、死というものの現実をおそらく初めて体験したのではなかったろうか。かわるがわる小鳥にさわっては、「ホントダ、ツメタイ」と小声でつぶやく彼らの姿には、好奇心というよりは、厳粛な儀式に参加しているような緊張があった。

この時、彼らは一体、どこにいたのだろうか。他のほとんどの園児がいつものようにそれぞれの好きな遊びに興じている中で、この一隅だけは、非日常的な、いわば「祝祭的空間」が現前していたと言える。とすれば、そこに流れていた時間もまた「祝祭的時間」であり、均質に永年に流れ去っていく客観的で日常的な時を測るクロノスとしての時間ではなかった。むしろ、クロノスとは直角に交わる垂直方向の時間の流れとでも表現できるだろうか。この時この場では、ある意味で、日常の時の流れは静止していたとさえ言えるだろう。そして、この祝祭的空間に在って祝祭的時間を共にした子ども達は、感覚的に生と死の深い意味に触れたと言うことができるだろう。そして、それを演出したのは、教師のすぐれた感覚であり、人間としての深さであったかもしれない。

ミヒャエル・エンデの「モモ」にも象徴的に描かれているように、現代生活はあまりにも時に追われている。新聞のテレビ欄を読み、見たいテレビのために五時になったからと言って遊びを中断して家に帰って来る子を見る時、四才児でもう時間がわかり文字を読めるなどと単純には喜べない、現代社会の一面の象徴を見せつけられる。こんな幼児にも、すでに、原稿の〆切に追われるおとなの世界と等質な生活がしのび寄っている思いがする。こうした意味で、園行事のあり方などにもまだまだ工夫の余地があると思われるのである。

せめて幼児期だけでも、測られる時に束縛された生活を減らし、彼らの世界を、親や教師のみではなく、幾分かは神か英雄の手にゆだねておきたいのである。

（新潟大学）